

# SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

## ダラス・バイヤーズクラブ

2013年・アメリカ映画  
配給/ファインフィルムズ・117分

2014 (平成26) 年2月26日鑑賞      テアトル梅田

### Data

監督: ジャン＝マルク・ヴァレ  
脚本: クレイグ・ボートン/メリッサ・ウオーラック  
出演: マシュー・マコノヒー/ジェニファー・ガーナー/ジャレッド・レット/デニス・オヘア/スティーブ・ザーン/マイケル・オニール/ダラス・ロバーツ/グリフィン・ダン/ケヴィン・ランキン/ブラッドフォード・コックス

## 👁️👁️ みどころ

『評決のとき』(96年)、『アミスタッド』(97年)、『リンカーン弁護士』(11年)におけるカッコいい弁護士役がよく似合う、イケメン俳優マシュー・マコノヒーが21kgも減量して、実在のHIV患者者に挑戦! ええー、これがあの・・・?

突然のHIV宣告。俺は同性愛者じゃない!なのに、なぜ俺がHIVに?いくらそう叫んでも、現実が現実。生きるためのクスリを手に入れなければ・・・。余命30日を宣告された男が、なぜその後7年間も生き続けることができたの? 良し悪しではなく、そんなダイナミックな男の生きざまをしっかりと確認したい。

同時に、「丸山ワクチン」に代表される、医学界における新薬承認のシステムの問題点のお勉強もしっかりと・・・。



## ■□■ええー、これがあの・・・? 21kgの減量に注目! ■□■

映画で「主演」を張るについては、必然性さえあれば、女優は「脱ぐ」覚悟がいる。また、男優女優を問わず、過激なアクションや過激な増減量に挑戦しなければならないこともある。『G. I. ジェーン』(97年)にみるデミ・ムーアの超過激なアクションは女優としては超異例だったし、『モンスター』(03年)にみるハリウッド・ビューティ、シャーリーズ・セロンの13kgの増量や、美人顔からモンスター顔への転換も異例だった(『シネマルーム6』238頁参照)。邦画では『モンスター』(13年)における高岡早紀の「変身ぶり」が見どころだったが、ちょっとマンガっぽい面も・・・(『シネマルーム30』未掲載)。

『マシニスト』（04年）では、30kgも減量し、1年間365日眠っていない主人公を演じたクリスチャン・ベイルの役作りが話題になった（『シネマルーム7』382頁参照）が、本作では1969年生まれの端正な顔立ちが「売り」の俳優マシュー・マコノヒーが21kgも減量してロン・ウッドルーフ役に挑戦！『評決のとき』（96年）における若手の真面目な弁護士から、『リンカーン弁護士』（11年）でリンカーン・コンチネンタルを移動する法律事務所とする、少しヤクザな弁護士に変身した（『シネマルーム29』178頁参照）のがマコノヒー。彼は『アミスタッド』（97年）でも、有能な若手弁護士役の演技が際立っていた。また、レオナルド・ディカプリオがマーティン・スコセッシ監督と五度目のコンビを組んだ『ウルフ・オブ・ウォールストリート』（13年）では、「ちょい出演」だったものの、ディカプリオにウォール街に生きる男の心構えを教える重要な役を「怪演」していた。

マコノヒーはテキサス生まれだから、カウボーイとロデオの愛好者。そんな彼がクレイグ・ポーテンが書いた本作の脚本に興味を示したことから本作の製作が動き始めたが、「余命30日」と宣告されたHIV患者ロンを演じるために21kgも減量した彼の姿は、これまでよく知っているハンサムなマコノヒーの姿とは全くの別人。これがあの・・・？『キャバレー』（72年）でアカデミー賞主演女優賞とゴールデン・グローブ賞女優賞をW受賞したライザ・ミネリをして、「マコノヒーがアカデミー賞を取れないようなことがあれば、私のをあげるわ！」と言わしめた、マコノヒーの減量ぶりに、まずは注目！



## ■□■80年代のHIV告知を、今のガン告知と比べれば■□■

役所広司主演の『象の背中』（07年）で見たように、かつてガンは「不治の病」だった（『シネマルーム16』382頁参照）。しかし、近時はお笑い芸人の宮迫博之が早期復帰してきた例に見るように、早期発見し、早期摘除さえすればガンは簡単に治る病気になっている。ところが、今でもHIVはそうはいかない。まして、1985年にHIVで死亡した歌手「ロック・ハドソン」について、ロン（マシュー・マコノヒー）たちが「あのハドソンがゲイだったとはな」と噂していたように、かつてHIVとゲイ愛好者とは切っても切れない関係だった。したがって、電気技師という「生業」は持っているものの、ロデオ好き、賭博好きのうえ、無類の女好きのロンは、セパード医師（デニス・オヘア）から「あなたはHIVに感染しています」と宣告されても、「俺はゲイじゃないんだから」という理屈で、その受け入れを拒否したのは当然。しかも、「余命は30日」と言われると、「この世の中に俺を30日で殺せる奴などいない」と叫び、病院を飛び出していったのも当然だ。しかし、ガラにもなく文献を読みあさり、HIVの発症原因を調べてみると、あまりにも多くの異性間の性交渉を続けていると、やはり感染の可能性が高まるらしい。そんな現実を知らされた人間の対応はさまざまだが、ロンの場合は、そこから本作に描かれる生きるための闘いが始まっていくことに。

そのためには、まずHIVの薬（特効薬）を求めなければならないが、調べたところ目下AZTという新薬が開発中で、近々発売されるらしい。もっとも、アメリカも日本と同じように新薬の承認までには長い時間がかかるようで、今は未承認だから、病院からもらうことは不可能。セパード医師の下で働いている若い女医のイブ（ジェニファー・ガーナー）にも頼んでみたが、答えは当然ノー。そんな中、生きるためにロンが考え出した新薬獲得の方法とは・・・。

## ■□■ここにも異端派医師が！■□■

本作に見るセパードは、病院ぐるみで製薬会社と組み、HIVのための画期的な新薬としてAZTを政府に承認してもらうことに躍起になっている医者だ。この手のタイプの医者は概ね世間的評判も良く、お金もたくさん稼いでいるが、倫理的にはイマイチ・・・。黒澤明監督の『赤ひげ』（65年）で三船敏郎が演じた新出去定医師は金や名誉を一切求めず、貧しい患者のためだけに生きる理想的な医者だったが、すべての医者にそんな倫理を求めるのは無理というものだ。

他方、愛媛県の宇和島徳洲会病院の万波誠医師は、数多くの腎臓移植手術を行うことで有名になったが、2006年に彼が執刀した生体腎移植に関連して臓器売買事件問題が発生。これによって、同医師の保険医登録を取り消す行政処分まで検討されることになったから大変だ。伝えられたところによれば、万波医師は一方では熱心な支持者がいるが、他方では移植をしない患者には冷たい、移植後に問題が起きると途端に素っ気ない対応をする、頑固で人の助言忠告を聞こうとしない等の悪口も言われている。また、1944年に皮膚結核の治療薬として誕生した「丸山ワクチン」はガン治療にも有効だと言われながら、

未だガンに対する医薬品として承認されていない。その理由はよくわからないが、きっとそこには1992年に死亡した故・丸山千里医師に対する嫉妬も含めて、医師会内部のさまざまな思惑や勢力争いが絡んでいるのだろう。

このように日本だけ見渡してもいろいろな「異端派」の医師がいるが、ロンが苦勞の末にたどり着いたのは、メキシコで掃溜めのような状況下でHIV患者の治療にあたっているバス医師(グリフィン・ダン)。彼はアメリカ国内で医師免許をはく奪されたというから、かなりの「異端派」だが、ロンが聞いていても私が聞いていても彼の説明は説得力がある。ロンがバス医師にたどり着いたのはHIV宣告を受けてから30日目くらいだから、バス医師の治療方針に従った、ここからのロンの生き方はいわば「付録」。そのためもあり、それまでは酒、ドラッグ、セックスとハチャメチャな生活を送っていたロンも、以降はそれをすべて絶ち、生きたいという欲求のみに従って行動し始めたが……。

## ■□■グイは大嫌いだが、女は大好き！おカネも大好き！■□■

本作でマシュー・マコノヒーは、はじめてアカデミー賞主演男優賞にノミネートされた。マコノヒーは本作でHIV宣告後7年間も生き、1992年9月に死亡した実在の人物になりきっているから、受賞の可能性はかなり高いはずだ。『赤ひげ』では、小石川養生所に「就職した」加山雄三演じる保本登医師は、当初は戸惑いあるいは反発しながらも、最後には赤ひげと同じような医師として生きる決心を固めたから立派なもの。しかし、本作に見るロンは決してそんな理想的な人物ではない。それは映画の冒頭、ロデオを見ながら女とのセックスに夢中になっているロンの姿を見ればよくわかる。また、HIV宣告後のハ



チャメチャな行動を見てもよくわかる。そもそも、あんなにガリガリの身体になれば、「俺はどこか悪いのでは？」と心配し、病院で検査を受けるのが普通だが、それは「国民皆保険」が完備している日本だけの常識だ。

そんなロンもバス医師の治療を受け始めてからは酒、ドラッグ、セックスの面では人が変わったように真面目になったが、おカネ大好きという面では昔と同じ。新薬の値段が高いのは当然だから、AZTの「毒性」に見切りをつけたロンがバス医師の指示どおりの薬を飲むことによって生きる道が見つかったのは幸いだが、同時におカネも稼がなくちゃ…。そんなロンの生き方が映画になったのは、HIVの患者に対してその薬を売りさばくために本作のタイトルになっている「ダラス・バイヤーズクラブ」を設立したためだ。その目的はHIV患者の命を1日でも延ばすこと。そういえば聞こえはいいが、ロンにとってそれは副次的なもので、主たる目的は薬を売りさばくことによってカネを儲けることだった。自分が生きていくためにはもちろん薬が必要だが、同時にカネも必要ということをよくわかっていたわけだ。ロンの理屈は、「ダラス・バイヤーズクラブ」は未承認の薬を売りさばくための組織ではなく、あくまで会員制のクラブにすぎず、会員に登録すれば薬をタダで配ってやっているだけ、というものだが、さて、そんな「屁理屈」が通用するの？

## ■□■あちらが主演男優賞なら、こちらは助演男優賞！■□■

マシュー・マコノヒーが21kgの減量なら、私だって〇〇kg！マシュー・マコノヒーが主演男優賞にノミネートなら、私だって助演男優賞にノミネート！ジャレッド・レトは俳優としてはそんな風にマコノヒーに対抗しながら、トランスジェンダーでHIV患者のレイヨンという役柄では、ロンのビジネス・パートナーとして重要な役割を果たしている。『ミルク』（08年）におけるショーン・ペン（『シネマルーム22』42頁参照）や『ブロックバック・マウンテン』（05年）におけるヒース・レジャー（『シネマルーム10』262頁参照）、さらに『プレートで朝食を』（05年）におけるキリマン・マーフィー（『シネマルーム12』303頁参照）等のように、ゲイの役やトランスジェンダーの役は個性派俳優なら誰でも一度はやってみたいのかもしれないが、本作に見るジャレッド・レト演じるレイヨンはまさに気味が悪いほど迫真の演技。

レイヨンはイブの患者だったから、2人の出会いはロンがレイヨンの隣のベッドに寝かされたためだが、当初の出会いは最悪。ゲイ嫌いのロンが、レイヨンのような、男か女かわからないトランスジェンダーを毛嫌いだしたのは当然だ。しかし、ロンがメキシコはもちろん日本やオランダ、イスラエル等から仕入れる未承認の薬をアメリカで売りさばくためには、大量の買い手となるHIV患者が必要。そしてそのためには、HIVに感染している多くの同性愛好者を知っているレイヨンの協力が不可欠だ。それがわかると、ロンの頭の切り替えは早い。当初はそんな利害で結ばれた2人だったが、物語が進んでいくにつれてその信頼関係は・・・。

## ■□■「手入れ」は受けたし、訴訟にも負けたが・・・■□■

ロンとレイヨンが運営する「ダラス・バイヤーズクラブ」が軌道に乗ってくると、皮肉

なことにセパード医師の病院のH I V患者はガラガラ。H I V患者の多くは、セパード医師の治療より「ダラス・バイヤーズクラブ」でもらう薬を希望し始めたわけだ。こんな状況はロンにとっては思惑どおりで理想的だったが、コトがここまで大きくなってくると、セパード医師や製薬会社そして新薬を承認するための国の「システム」がそれを許すはずがない。ロンたちが運営する「ダラス・バイヤーズクラブ」を摘発するための法律は〇〇法や△△法などいくらでもあるから、裁判所の捜索令状を取り、ブツを押収してしまえばそれでOK。病院と製薬会社と政府はそう考え、そう実行したわけだ。

しかし、それに対するロンの反撃もすごい。ロンは個人の健康のために薬を飲む権利を侵害する国の動きに対して徹底抗戦の構えをとり、弁護士を使って訴訟を提起したわけだ。本作はロンの生きざまが実に生き生きと描かれる反面、セパード医師や製薬会社が一方的に悪者に描かれている感が強い。また弁護士の私としては、ロンの弁護士がどんな法律をどのように活用し、どんな裁判を提起したのか？その見通しをどのように立てていたのか？その費用はいくらかかったのか？等々について興味があるが、本作ではそれに一切触れることなく、結論だけが示される。

ちなみに、ネット情報によれば、「丸山ワクチンによる治療を望む患者あるいはその家族は、丸山ワクチンの治験を引き受けてくれる医師を探し出し、治験承諾書（丸山ワクチンによる治験を引き受けるという担当医師の承諾書）およびS S M治験登録書（現在までの治療経過をまとめた書類）を整えさえすれば、丸山ワクチンの投与が受けられるという1972年以来的状況が続いている」らしい。また、「有償治療薬として、2011年12月末、丸山ワクチンの使用者は38万9000人を超えたとされる」らしい。セパード医師らの努力によって1987年にはAZ TがH I Vの新薬として承認されたそうだが、さてロンたちが生きるために「ダラス・バイヤーズクラブ」で売りさばっていた薬は・・・？

先日発表された山中伸弥教授の「i P S細胞」やミニスカートとかっぱぼう着が似合う小保方晴子博士の「S T A P細胞」をめぐるニュースは大いに国民の関心を集めたが、医療の進歩や薬をめぐる医学界の暗躍もすごい。本作ではロンの生きざまが最大の見どころだが、同時に新薬をめぐる医学界のシステムについても、少しは勉強したいものだ。

2014（平成26）年2月28日記

## [追記]そろってのアカデミー賞の受賞おめでとう！

本作で観たマシュー・マコノヒーのやせ方にはホントにビックリしたが、その努力の甲斐あって、第86回アカデミー賞では見事主演男優賞を受賞！さらに、気持ち悪いほどのトランスジェンダーぶりを発揮しながら、H I V患者役を演じたジャレッド・レトも、見事に助演男優賞をゲット！2人の信頼関係が本作のストーリーの軸だっただけに、2人そろっての受賞に拍手を送りたい。もっとも、評論のラストで触れた「S T A P細胞」のオボちゃんこと小保方晴子博士の方は、今や「天国から地獄」状態だから、両氏ともこの受賞で有頂天にならず、さらなる精進を！